

科学と仏教

森 章司

はじめに

ご紹介いただきました森でございます。主に仏教でも一番古い、今から二千年以上も前の、お釈迦様の時代の仏教を研究しておりまして、それがもつとも現代的な科学との係わりをお話しさせていただくのは、妙な取り合わせだという気がしないではありません。

なぜこんな私にお話の口がかかったかと考えてみますと、以前に仏教の業の思想と関連させて、現代のもつとも大きな問題とも言える、臓器移植などの生命倫

理を考える論文を書いたことがございまして、思いの外これが注目されました。これが一つのきっかけではないかと思えます。またもう一つは、偶然にも今日の題目とよく似た、「仏教と科学」という文章を書いたことがございました。おそらくこれも何らかの関係があるのではないかと思います。

それはともかくといたしまして、先の二つの文章とも、科学と関連してはおりますが、純然たる仏教畑のものでありまして、私には現代科学の知識は全くありません。自慢ではありませんが、むしろ科学音痴と言

っても差し支えありません。ですから今日のお話も、科学とは関連しますが、内容は仏教の、それも古い時代のお話が中心になることを予めお断りさせていただきます。

一 釈尊時代と現代

さて、現代はお釈迦様の時代と比べますと、想像もできないほど科学の進んだ時代です。こんな世の中になるとは、それこそお釈迦様でもご存知なかったと思います。そのお陰で、豊かにもなりましたし、便利にもなりました。日本ではもう飢えに苦しむということもなくなりました。平均寿命は八十歳を越えました。遺伝子さえ自由にコントロールできるような時代になろうとしております。しかし反面、核戦争の脅威にもさらされていますし、地球環境が猛烈に悪化しています。

それでも皆さんは、それなら三十年前の世界、百年前の日本に戻ろうかということになれば、多分反対なさるのではないかと思います。この豊かさで便利さの

中には、猛毒が含まれているのですが、われわれはもう中毒になってしまつて、この豊かさで便利さなしには、生きていけなくなつていふと言つてよいと思ひます。と言つてこれからもこんなスピードで科学が進歩していったら、社会はどんなものになつてしまふのか、空恐ろしさを感じざるをえません。しかしまだ今のこの次元なら、私たちの想像できる範囲をそれほど大きくは越えていないのではないかと思います。豊かさ・便利さと、環境保護・資源保全が両立する可能性もないわけではないでしょう。

しかし最近の遺伝子組み換えによる生命操作や種の改造、コンピュータ技術の発展などは、これからの社会がどういふことになるのか、想像できないものを持っています。以前は、神の手に委ねられていたものが、どんどん侵食されています。コンピュータによるバーチャル世界の現出によつて、夢とうつつと幻の世界がオーバーラップし、物質世界と精神世界の区別がつきにくくなつています。最近の未成年者による信じられないような数々の事件は、こういうところに根源がある

るのではないかと推測されています。最近の精神病学は、精神療法ではなく薬物療法に流れが移つていつていふそうです。私たちは食べてはならない禁断の木の実を食べてしまったのかもしれない。

東洋哲学研究所が企画されましたように、現時点ですっきりと科学の現状と未来を把握しておく必要性があるでしょう。そしてこれに基づいて、私たち宗教者がはつきりした姿勢を確立しておかなければならないのではないかと思います。

それには私たちが、正しい価値観を持つて、世の中をリードしていくことが必要だと思ひます。現代は価値の多様化の時代だと言われますが、価値なら何でもいいというわけではありません。少なくとも私たち一人ひとりとっては、正しい価値観は一つであるはずで、一人の人間の中に多様な価値があつたら、多重人格ということになります。また価値観がなければ、それこそ夢遊病者のような人間になつてしまふでしょう。ですから、私たちは、自覚はしていないかもしれませんが、ある特定の価値観にしたがつて日々を暮し

ているに違ひないのです。しかしそれが「正しい」と自覚できていないとすると問題です。「正しい」と自覚できていない価値観は、これによつて自信を持つて世界をリードしていくことなどできません。

しかし何が正しくて、何が間違つていふかということとは、なかなか難しい問題です。最近私は、日本仏教学会という学会で、「経蔵の dharma, adharma と律蔵の dharma, adharma」というテーマの研究発表をさせていただきました。adharma は「不法行為」というときの「不法」に当たりますので、dharma は「適法」ということになるでしょうか。「正」「不正」の同意語ということができると思ひます。しかしあまりうまくまとまりませんでした。ですから何が「正しい」かは、なかなか難しい問題です。

二 仏教における「正」と「真実」

そこでまず仏教における「正」とは何かということを考えてみたいと思ひます。仏教の言葉の中で「正」といふ言葉が使われているのは「八正道」です。この

なかの「正」とは何でしょうか。

八正道とは「正見」「正思」「正語」「正業」「正命」「正精進」「正念」「正定」などの八つの正しい生活方法を言いますが、仏典にはこの中の「正」自身を解説したものはありません。しかしその最初に掲げられる「正見」は、甘蔗(さとうきび)や稲や麦の種子に譬えられまして、これを地に蒔いてよく灌漑すれば、美味き果報を得ることができるように、正見の種子を蒔けば、正思以下正定までの果を得るとされています(『雜阿含』卷二十八、『増一阿含』卷八)。ですから「正見」が「八正道」の基礎であることが分かります。それはそうでしょう、正見は「正しいものの見方」を意味しますから、「正しいものの見方」ができれば、「正しい考え方」も生まれますし、「正しい言葉」「正しい行為」「正しい生活方法」「正しい努力」「正しい注意力」「正しい精神集中」も出てくるはずで。

インドの言葉では哲学のことを「ダルシヤナ(darśana)」と言いますが、これは「見る」という意味のドリシユ(dṛś)という動詞からできた言葉でありまして、「見る

こと」を意味します。それは「ものの見方」が一切の人間の行為の基礎であることを示しているわけです。

そこで次に、この「正しいものの見方」とは何かとすることが問題となります。仏典では、この正見は「四諦」を「あるがまま」に知ることと解説されています。四諦は皆さんもご承知のことと思いますが、「四聖諦」とも言いまして、苦諦・集諦・滅諦・道諦の四つを言います。「諦」とはサンスクリット語でサティヤ(satyā)、パーリ語でサッチャ(sacca)でありまして、現代語では「真理」とか「真実」と訳されています。したがって「正しいものの見方」は「真理」を「あるがまま」に見ることと言ってよいわけです。

そしてこの「真理」が、非常に仏教的でありまして、しかも今日の「科学と仏教」という主題とも密接に係わってきますから、少し丁寧にお話ししたいと思えます。

‘satya’は、英語ではbe動詞に当たるアス(εἶναι)という言葉の現在分詞からきておりまして、直訳しますと「ありつつあること」「存在しつつあること」という意

味になります。「ありつつあること」が「真理」「真実」に当たるわけです。

またg動詞に当たるサンスクリット語にはもう一つありまして、それはブー(bhū)という語です。この過去分詞のブータ(bhūta)も「真理」「真実」という意味を表わします。大乘仏教の大乘仏教たる旗印は「諸法実相」とされますが、この「実相」に当たる原語の一つが‘bhūta’です。ですから仏教で「真理」とはどういうものかということになれば、それは「あるがまま」ということになります。そこで漢訳の聖典では、真実は「如」とか「実」とか、「如実」と訳されます。

また仏のことを「如来」とも言いますが、このサンスクリット語はタターガタ(tathāgata)であることは、皆さんもよくご存知のことと思います。これは‘tatha’あるいは‘tathā’が「如」と訳されて、如から来た人という意味になるわけですが、この「如」も真実を表わします。それではこの‘tatha’‘tathā’はどういう語源を持つかと言いますと、これは指示代名詞のタッド(tad)からきています。英語で言えば、thatとかitに当たりま

す。ですから‘tathā’の本来の意味は、「それがそれとしてあること」という意味です。

また『法華経』の「十如是」の「如是」に当たる原語はヤター(yathā)という言葉になるのではないかと思えますが、この‘yathā’も関係代名詞のヤッド(yad)からきています。まさしく「それがそのようにあるように」という意味です。

このように仏教の言う「真理」は、「あるがまま」で、しかもこれとかそれと指し示すことができる、身の周りにある具体的なものを指していることになります。したがって「真理」とか「真実」と訳すよりも、私は「事実」と訳したほうがよいと考えています。

西洋哲学やキリスト教などでは、「真理」は深遠、神秘的なもので、現実の奥に隠されていて、特別な能力がなければ見えないものです。また「真理」を具現化したものが「神」ですが、神はその姿を私たちに現わしてくれるようなものではありません。「それ」とか「これ」と指で指し示すことができるようなものでないわけです。

しかし「真理」に相当する仏教の「事実」はそういうものではなく、普段の私たちの身近にあるもので、「それ」とか「これ」と指で指し示すことができるようなものというようになります。私も事実であれば、皆さん一人ひとりも事実です。ここにこうして日本青年館という建物があるというのもまた事実です。また、キリスト教的な土壌から言くと、「真・善・美・聖」という言葉がありますように、真理は「善」なるもの、「美」なるもの、「聖」なるものというようになります。神が「悪」であつたり「醜」であつたり「俗」であつたりすることはありません。もしそんなことを言ったら神を冒瀆する罪として、異端審問にかけられて、火あぶりの刑に処せられるかもしれません。しかし身の周りにある「あるがまま」は、必ずしも善であつて、美しく、聖なるものばかりではありません。悪くて汚らしいものも、また「あるがまま」の姿です。私はお世辞にもきれいなことはありません。また私はそれほど悪人だとは思っておりませんが、時々悪いこともします。仏教では酒を飲むことは禁じられてお

りますが、私は酒が大好きで、毎日「不飲酒戒」を犯しています。しかしこれももちろん「事実」です。罪は「真理」に背くことで、だから「不飲酒戒」を破ることは罪だから、「真理」ではないとは言えないわけですから。

したがって四諦では、私たちが生まれ、古い、病気をし、死んでいくということも事実ですから「苦諦」と呼ばれるわけです。そういう苦しみが存在である私たちには、汚らしい煩惱が渦巻いているというの「あるがまま」の「事実」ですから、「集諦」とまとめられるわけです。しかし一方では、私たちには仏性があり、悟りうる可能性を持っているというの「あるがまま」の姿です。ですから現実に悟りを実現する方法もあるわけで、だから「滅諦」とも呼ばれるわけです。

三 如実知見

「八正道」の基礎になる「正見」は、そうした事実を事実として知ることとされるわけです。そうしてこの

「正見」を得るように努力しなさい、そうすれば「八正道」は得られますよ、というわけです。

原始經典には、こういう教えが繰り返し繰り返し出てきます。四諦について言えば、パーリ語と漢訳された原始聖典を併せると、ほぼ五百回くらい出てきます。お釈迦様は四十五年間説法され続けたということです。これを月数に換算すると五百四十カ月になりますから、単純に計算すると、一カ月に一回くらいは、四諦を説かれたことになります。このように繰り返し繰り返し説かれたということは、私たちがそうした「あるがまま」を「あるがまま」に見ていない、知っていないからでしょう。分かっているつもりになっているけれど、本当は分かっているからです。

「苦諦」というのは、普通「四苦八苦」と説明されます。生老病死の四つの苦しみに、怨憎会苦、愛別離苦、求不得苦、五盛陰苦の四つの苦しみを加えたものです。あるいは皆さんは、この世に生まれてきた限り、いつかは古い、死んでいかなければならないということくらいは知っている、とおっしゃるかもしれませんが、し

かし私たちの知っている「死」はあくまでも抽象的な「死」であり、他人の死であつて、必ずしも私の「死」ではありません。私くらいの歳になってきますと、身近な人が一人また一人と死んでいきますし、だからお葬式にお参りさせてもらう回数が増えてきておりますが、お清めで一杯飲んだら、とたんに一体どのどいつが死んだんだといった気分になります。自分の葬式でないから気楽なものです。もちろん私がすでに生死を超越している、何時死んでも悔いはない、などという境地に達しているわけではありません。ですからこれは、「死」が私にとって「これ」とか「それ」と指し示すことのできる、具体的な身近にある「事実」にはなっていないという証拠でしょう。だからこそお釈迦様は繰り返し、繰り返し、私たちは必ず死ぬのだぞ、と説かれたに違いありません。

「正見」が四諦を如実に知ることと解説されるのは、こういうふうな「死」を私の「死」としてリアルに知ることを意味します。ギリシャに「汝自身を知れ」という言葉があつて、ソクラテスの言葉として有名です

が、オギャーと生まれてつき合いが一番永いのは自分自身ですが、私たちは私たちの「あるがまま」を「あるがまま」に知っていると云えるでしょうか。ことほどさように、「あるがまま」を「あるがまま」に知るということは難しいことなのです。

ですから苦しみを苦しみとして「あるがまま」に知ったら、これを解決しようという働きが自ずから生まれてくるようなものでなければなりません。その原因が煩惱であると分かったらそれを断じ、私たちに仏性があると分かったらそれを顕わそうという働きが生まれてくるようなものでなければなりません。「分かつちやいるけどやめられない」という分かり方の程度では本当の分かり方ではないということです。

このように私たちは、と言うと失礼ですね、少なくとも私は「あるがまま」を「あるがまま」に知ることができていません。日常の忙しさにかまけて、自分を振り返るという時間が持たなくなっているということもあるでしょう。確かに医学の進歩で、病氣や死の苦しみが遠くなっているということもあるかもしれませ

ん。しかし仏教の教えにしたがえば、その最大の原因は、私は人とは違う、私だけは特別だ、私は病氣も死もきちんとコントロールできるんだ、という観念が知らず知らずのうちに巣くっているからだと言います。簡単に言えばインド語で言うアートマン (ātman)、すなわち「我」があつて、これがあるから何とかなるはずだという、私たちが生まれたとき、いや生物が誕生したときから持っている、本能的な観念があるためだと言うのです。そしてここから自分さえよければよいという煩惱も生まれてくるのです。

しかし私たちは肉体や精神的な要素が集まって、仮にこういうふうになり立っているだけであつて、この中に「ātman」というようなものはない。だから生まれたら死なないものはない、原因があれば結果があるのは当然だというわけです。これが「縁起」です。

この世の中は、さまざまな直接的原因や、間接的原因から成り立っているから、物事を一面的に見てはいけません。私たちは永久だと考えるのも間違っているし、死後には何にもないと思えるのも間違っている、これ

が「中道」です。

こうした「無我」「縁起」「中道」の立場に立てば、私は特別で、私は死なない、などという考え方も出てこないし、自分中心主義もなくなつて、平等に、公平に、正しくものを見ることができると。これこそが「あるがまま」を「あるがまま」に見るための基礎で、こうして得られたものが「智慧」と呼ばれるのです。

これを「如実知見」と言います。原始經典には 'yathābhūtam pajānāti' という言葉がしょっちゅう出てきますが、これが「如実知見」に当たります。'pajānāti' という言葉は、感じから想像できるかもしれませんが、'paññati' すなわち「般若」という言葉の動詞形です。「般若」は『般若心経』の般若です。これこそが仏教の「正見」ということになります。

ですから仏教の「正」とは、自己中心主義を取り去り、無我の立場、立場のない立場で、公平に、平等に、「あるがまま」を「あるがまま」に見ること、ということになります。それが「縁起的ものの見方」であり、また「中道的ものの見方」に相当します。そしてそれ

が「正しい思想」にも、「正しい行動」にも「正しい生活」にも結びついていくというわけです。そうして発見された「真実」が四諦としてまとめられました。仏教の教えはすべからず、こうした如実知見で発見されたものを、人々に説かれたものです。

四 「あるがまま」は変わる

以上は原始仏教と呼ばれる、最初期の仏教の教えに基づいてお話ししました。しかしお釈迦様の時代は科学も発達しておりませんでしたし、経済も未熟でした。その時代は、今食べているご飯は誰が作ったお米で、茶わんは誰が作ったという一人ひとりの顔の分かる時代でした。古代インドでも医学が発達していて、お釈迦様の主治医であつたジーヴァカはある王様に脳手術をしたという記述もあります。しかし虫を取り出してそれで治つた、というようなレヴェルの話です。ですからいわば自然の中で、人と人が緊密に関係しあつて生活できた時代であつたと言ふことができます。

しかし今は人間は社会的存在で、社会抜きに人間は

存在しえませんが。しかもその社会は世界規模にまで広がっています。また高度な科学世界の中の存在でもあります。今朝食べたパンの材料の小麦は、どこの誰が作ったなどということを知ろうと思つたつて知ることではできません。おそらくどこか外国で作られたものでしょう。あるいは遺伝子組み換えで改良された小麦が混じっているかもしれません。

ですから釈尊時代の身の周りにあつた「あるがまま」と、現代の私たちをとりまく「あるがまま」は著しく異なっています。原始仏教時代は私たち一人ひとりだけを如実知見の対象にしておれば、それで十分であつたわけですが、今はそういうわけにはいきません。私たちの身の周りが、とてつもなく大きな世界になつてしまつています。科学や経済や社会の発展に伴つて、私たちをとりまく「あるがまま」は変化していくからです。

仏教は原始仏教時代から、アビダルマ仏教（部派仏教）時代を経て、初期大乘仏教時代、中期大乘仏教時代、密教時代と発展してきましたが、私はそれは世界観の

広がりを示すものだと考えています。すなわち原始仏教は、有情世間を如実知見の対象にしましたが、アビダルマになりますと、私たちがよりどころとしている宇宙や地球も対象になりました。科学の発展によって、私たちの精神作用の分析も、物質の分析も緻密になりました。しかしまだこの段階では、佛・菩薩の境界など悟りの世界を対象とすることはありませんでした。しかし大乘仏教になると、悟りの世界をも対象とするようになりました。だから極楽浄土とか、佛の悟りの内容などが積極的に説かれるようになったわけですね。瑜伽行派という大乘仏教の学派では、心の分析は更に緻密になりました。

また、中国仏教は中国仏教として展開しましたし、日本仏教は日本仏教として独自の発展をしました。インドではその時代時代に応じて新しい経典が作られましたが、それは「あるがまま」が変化したので、その「あるがまま」を如実知見した結果が新たな経典として製作されたからです。もし新しい経典が作られなかつたとすれば、それは仏教の死を意味します。新しい経

典がどんどん作られれば作られるほど、仏教が現実において生き生きと活動している証拠だったのです。

ところが、中国や日本では、経典はインドで作られたものでなければならぬという変な約束ができてしましましたから、新しい経典が作られる「よき伝統」「本来あるべき伝統」が失われてしまいました。そのかわり、親鸞とか道元とか日蓮といった祖師たちの著述が「経典」のかわりを果たしたと言つてよいと思います。

五 仏教と科学

ところでこれら「経典」がもし、私たちをとりまく「あるがまま」を「あるがまま」に知見して得られた結果であるとする、それは科学とはどういう関係になるのでしょうか。試みに『広辞苑』の「科学」という項目を引いてみましたが、「世界の一部分を対象領域とする経験的に論証できる系統的な合理的認識。研究の対象または方法によつて、種々に分類される（自然科学と社会科学、自然科学と精神科学、自然科学と文化科学など）。

通常は哲学と区別されるが、哲学も科学と同様な確実性を持つべきだという考えから、科学的哲学とか、哲学的科学とかいう用法もある。」と解説されておりました。「経験的に論証できる系統的な合理的認識」というのは、簡単に言えば、身近にある「あるがまま」を「あるがまま」に知ることと云えるのではないのでしょうか。とするならば、仏教と科学とはその立場において異なりはないということになります。

原始仏教やアビダルマ仏教は、現実の迷いの世界、すなわち私たちが住んでいるこの世界を主題にしておりますから、非常に合理的な宗教でありまして、特にアビダルマは科学と一体となつていふ言つて過言ではありません。その中には、物理学や天文学、地理学、心理学、医学などが渾然一体となつています。確かにこの時代は今から千五百年余も前のことですから、顕微鏡とか望遠鏡という「如実知見」の道具が発達してありませんでした。ですから、今から言うとおかしなところもあります。例えば天文学では、地動説ではなく天動説ですし、地球も球形ではなく円筒形と考えら

れておりました。

しかしその中で、太陽や月の運行、季節の移り変わりを合理的に解釈しようとしました。私たちのこの太陽系宇宙は銀河系宇宙に属しておりますが、現代の天文学では、我々の銀河系宇宙の外にも、例えばアンドロメダ星雲のような別の銀河系宇宙があつて、さらにこのような銀河系宇宙が数百個ないしは数千個集まつたものを銀河団と言ひ、これがすでに一万個近くも発見されていると言ひます。仏教では一つの銀河系宇宙を三千大千世界と呼び、この三千大千世界の外の十方に、同じような三千大千世界があると考へておりました。三千大千というのは千かける千かける千、すなわち十億を言うわけですから、現代の天文学的な宇宙観を持つていたことになります。また物理学の方面から言つと、物質は極微というこれ以上分割できない最小の物質が寄り集まつて形成されていると考へておりました。それは現在の知識で言つと、分子とか原子というものに相当するでしょう。

大乘仏教の經典は、一見するとこうした科学とは異

なる世界が描かれているように見えますが、それは佛の世界が如実知見された結果です。佛の世界は私たち凡夫の世界とは次元を異にした世界ですから、本来は言葉では表現できない世界です。それを表現しようとしているのですから、私たちの常識的な分別識からは、理解しにくいものとなっています。やつぱり佛と佛しか判らない「唯仏与仏」の世界と言ふべきでしょう。

このように仏教と科学はけつして矛盾するものでも、対立するものでもありません。むしろ共通する部分の方が多いのではないかと思います。こういう面でも仏教は、一神教の宗教とは大いに違います。キリスト教では宗教と科学の葛藤があつて、それは現在でも続いています。アメリカのいくつかの州では、学校で進化論や地動説などの現代科学の知見と同時に、キリスト教の神による創造説も、同じ時間だけ教えられなければならぬという法律ができています。要するに科学的真理と宗教的真理に齟齬があるから、そこで葛藤が起るわけです。

ところが仏教は、科学が進歩するにしたがつて、そ

れと順応してあひともに発展してきました。世界が広がり、如実知見が深まるにつれて、仏教の教えも広がり、深まつてきたということはお話しした通りです。

ところが私たちをとりまく、現代の「あるがまま」の世界は、そうした伝統的な知識のレヴェルでは理解できないほどに変わろうとしています。宇宙創造の謎が探られ、生命の神秘が解明されつつあり、情報技術の革命によってわれわれの生活は一変しようとしています。夢とうつつと幻の区別がつきにくくなってきました。それはおそらく精神生活や精神文化にも影響を与えずにはおかないでしょう。

仏教の言う「あるがまま」は現実を意味しますが、その現実がどうも従来の現実とは質を異にするようになってきているのではないかという感じがいたします。

しかし仏教の基本的な立場としては、これに棹さして古代に帰れ、というような主張は出てこないと思います。むしろ科学が進歩して、如実知見の方法が深まり、新しい知見が増えるのを歓迎するというのが仏教でしょう。そしてこの新しい如実知見を基礎として、

新しい經典が作られるのが仏教の伝統なのですが、「あるがまま」があまりにも急激に、ドラスティックに変わりつつありますので、もしこの世界に佛が現われたとするなら、戸惑われるかもしれません。またこのような「あるがまま」の世界を見て、どんな「經典」を作られるでしょうか。少なくとも佛ならぬ私には想像することができません。

そしてその凡夫としての私の何よりの不安は、私たちの未来の世界がどんな世界になるのか、どうもはつきりと思ひ描けないことです。けつして遠い未来ではなく、せいぜい五十年後、百年後の世界がどんな世界になっているか、それをはつきりイメージできる人はいないのではないのでしょうか。

最近の新聞に、科学技術庁の科学技術政策研究所というところがまとめたという、「二十一世紀中に実現する、あるいは実現してほしい新技術と、生活や社会の変化」というアンケートの結果を報ずる記事がありました。大学や企業などの科学技術系の研究者千二百人が回答を寄せていると言ひます。この中には人間が小

型化して食料・人口問題が解決するとか、再生医療が一般化して、人体は人工臓器で構成される、といった楽しい夢のようなものも、悪夢のような恐ろしいものも含まれているようですが、とにかくでんでんばらばらで、二十一世紀の世界が「あるがまま」にイメージできるような代物ではありません。

それは自然科学や生命科学や社会科学や人文科学や情報技術といったものが、てんでんばらばらの方向で進んでいて、統一的な世界観を描きにくくなっているからではないでしょうか。例えば、医学や生殖技術の発展によって、人類の未来は果たしてどうなるのか、遺伝子組み換えやクローン技術によって、植物の世界や動物の世界はどんなふうになっていくのか、あるいはIT革命がわれわれの精神活動や、文化にどんな影響を及ぼすのかといったことです。「あるがまま」の世界が、写真のピントがぼけるように、二重三重に重なるようになってきつつあるわけです。

六 科学に期待すること、危惧すること

は必然的に備わる力なのです。ですから「あるがまま」の如実知見が獲得できたら、未来の予知をすることくらは簡単なはずで、それが科学者の義務ではないかと思えます。そしてここから、今まで時代に応じて新しい經典や、祖師たちの教えが生まれてきたように、おのずから二十一世紀の「あるがまま」に応じた、新しい「正しい」価値観が生まれてくるはずで、

しかしこれはあまりに樂觀に過ぎるかもしれません。果たして科学に本当の意味の「如実知見」を期待できるのかという危惧もありません。四諦という教えにしたがえば、「如実知見」には苦しみは解決され、煩惱が断じられるという働きが自ずから働くはずだと申し上げましたが、果たして科学の発達がそういう方向に働いているか疑問です。確かに物質的肉体的な苦しみは軽減されつつあると言つてよいかもしれませんが、仏教的に言えば煩惱が残っているとすれば苦しみが残っているはずですから、それは本当の意味で苦しみの解決にはなつていないと言ふべきでしょう。あるいは「如実知見」が生まれる条件には「縁起」や

そこで今私が、科学に一番期待したいものは、現状がどんなふうになっていて、これからどうなっていくかを、総合的に見極めてもらいたいということです。そのためには、自然科学だけではなく、社会科学も、人文科学も、あらゆる科学を総動員することが必要でしょう。とにかく「あるがまま」を「あるがまま」に如実に知ることから出発しなければなりません。そしてそれをもとにして、私たちに「未来像」をきちんと示していただきたいと思います。科学者には、それぞれの科学分野で大所高所に立った、現状把握と未来がどうなるか、いわば「現在学」と「未来学」という領域を組み入れた上で、ぜひ研究を進めていただきたいということです。

仏教では、未来を予見するなどの一般の人間の能力を越えた、不思議な力のことを「神通力」と言いますが、その原語はサンスクリット語で「アビジュニヤー」(abhijñā)、パーリ語で「アビンニヤー」(abhinna)と言います。これは「知る」という動詞の「アビジャーナーティ」(abhiñati)からできた言葉ですから、如実知見に

「中道」に基づいたものの見方、「無我」や「空」の立場に立ったものの見方があるはずですが、現代科学にそうした条件が整っていると言えるでしょうか。

端的に言えば、科学者を駆り立ててきたのは、ただ「あるがまま」を「あるがまま」に知りたいという純粹に科学的な動機からだけであつたのだろうか、科学者が功名心に駆られ、あるいは一獲千金を夢見て、それで進歩したという面がなかったであろうか、ということです。もちろん後押ししたのは、便利さと豊かさを求める社会です。しかしそうであるとすると、果たしてそれは「科学」なのか、「科学技術」に過ぎないのじやないかという疑問も生じます。

アビダルマ仏教では、この地球が生まれてくるのも、やがて衰え、滅びていくのもすべて私たちの行為に依っているとされています。これを「共業」と言います。地球の滅する有り様は、次のように説明されています。滅亡の兆しは戦争です。これを「刀兵災」と言います。続いて「疫災」すなわち疫病が流行し、飢饉すなわち「飢饉災」がやってきます。これらを小の三災と言いま

す。この原因は美食に耽ること、怠ける（懶惰）こととされていますし、殺生しない、薬を布施し、食べ物を布施するなどすれば防ぐことができるかとされていますから、要するにすべて人災です。

そしてこの三災が繰り返されると、何度かに一度、地球を消滅させる火災が起こるようになります。これを「劫火」と言います。そしてさらに水災が起こり、風災が起こってついには宇宙が滅亡するとされます。これを「大の三災」と言いますが、要するにこれも遠因は「共業」の結果とされています。すなわち地球が滅亡し、宇宙が滅びるのも、われわれ有情の責任だということです。しかし、もし小の三災が起こらなければこれら大の三災は起こりませんから、これらの災害も防げるわけです。

このようにアビダルマでは、この地球や宇宙が滅びるのも、すべて有情がなす共業の結果とし、その根源に過度な欲望があるとするわけですが、私はこれは現代において証明されつつあるのではないかという気がしてなりません。過度の欲望の結果地球環境が悪化し、

オゾン層が破壊され、温暖化が進んでいます。資源も枯渇してきています。地上で核戦争でも起こって、われわれ人類が持っている核兵器が一度に爆発でもしたら、それこそ地球が砕け散るかもしれません。

自由主義経済は経済を発展させてきました。自由主義経済というのは、アダム・スミスの言うように、市場が欲望にしたがって自由に経済活動を行えば、見えざる手によって調和が保たれるということを前提としています。アダム・スミスは本来はグラスゴー大学の倫理学の教授でしたから、欲望は抑制されるべきものと考えながら、経済的発展のためには、暫くは目をつぶらなければならぬと考えたわけですが、今では欲望を充足させるこそが、最大の価値となっている感があります。どうもそこには、欲望の充足に対する反省どころか、人間の基本的権利であると考えられていた節がないではありません。それが現在では、物に対するだけでなく、生命の領域にまで適用されつつあります。バーチャルな世界では、全世界をわが物とするということも不可能ではありませんが、やが

てそれを現実において実現しようという輩が出ないとも限りません。

アビダルマでは善悪を、勝義・自性・相応・等起の四段階に分けています。勝義不善は生死ですが、自性不善は無慚・無愧・貪・瞋・癡としています。貪・瞋・癡の三毒には自性そのものの不善性が認められているわけです。仏教では悪の根源には過度な欲望があるということです。古くさい言葉で、現代でははやらなと思います。しかし仏教のみならず宗教の基本は、「少欲知足」であると思います。

このように仏教は科学をけつして排除するのでもなく、むしろ科学的な如実知見は、歓迎されるべきものであったと言っているかと思えます。しかし欲望というものに翻弄されて、無我・縁起、中道といった「如実知見」をもたらし基礎が忘れ去られたために、「現在学」や「未来学」がおろそかになってしまつて、技術だけが突出してしまった嫌がないわけではあります。もし現代科学が便利さと豊かさを追及することを自己目的とする「科学」であつたとしたら、それ

を「如実知見」とすることはできません。もしそうならそれは「正しく」ないし、本当に人類や生物や地球を幸せにする働きを持つことはないと思います。

ですから過度の欲望を断じて、無我・縁起・中道の立場に立つて、如実知見の生まれやすい環境を作つたうえで、現代の「あるがまま」を如実知見しなければならぬと思います。そうすると、伸ばすべきところも、矯正すべきところも、自ずから見えてくるのではないかと思います。われわれの進むべき道も自ずから示されるのではないかという気がいたします。それが「如実知見」の働きです。その条件作り、環境作りが私たち宗教者、仏教者の務めではないでしょうか。

終わりに

「科学と仏教」というテーマは、どうも私には荷が重過ぎたようです。十分に科学に関する知識を持っていないのに、生意気なことを申し上げたかもしれません。皆さんにどれだけ共感をもって受け入れていただいているか心もとないかぎりです。研究所のお役に立てた

か、忸怩たる思いがいたしますが、この辺で私の話を
終わらせていただきたいと思います。

(もりしょうじ／東洋大学教授)

(本稿は、二〇〇〇年十一月十七日に行われた講演内容に加筆
いたしましたものです。)